

世界はすべて実験室だ

——『榎本武揚』における裏切り者非英雄伝

ジボー・マーク

Mark Gibeau

安部公房の作品に出会ったのは約十二年前である。北海道大学図書館で偶然に「魔法のチョコレート」の英訳を見つけてから、次から次へと安部の作品を英語で、後に日本語で、むさぼり読んだ。その後数年間安部を本格的に研究したにも関わらず、『榎本武揚』という小説を耳にしたのはわずか三年前であった。安部の小説を殆ど読んだと思っていた私は驚いた。勿論自分の勉強不足ということもあるだろうが、英語で書かれた評論にはこの作品の存在を指摘する文書は何一つない。日本語では色々書かれたが、その大部分は作品が出た当時に書かれたもので、その後小説も劇もすぐに世間では忘れられたようである。

なぜ忘れられたかという点、単純に、評判が悪かったからである。安部が共産党から除名されて間もなく書かれて、『転向小説』として読まれた『榎本武揚』は自分の「アリバイ作り」の試みに過ぎないという評や「ブルジョア的『自由』の古巣へ回帰」だと批判する声が少なくなかった。^{*2} 政治的な意味を別にして、文体や内容の面でもこ

の小説は受け入れにくかったそうである。好評を得た『砂の女』（一九六二年）や『他人の顔』（一九六四年）に比べると明治維新の前後を歴史小説の手法で具体的に語る『榎本武揚』はかなり違うタイプの小説である。『比較文化論叢』8号に取り上げた一九五七年『けものたちは故郷をめざす』と同様に『榎本武揚』は多くの評論家に「実験小説」として片付けられる。この場合、「実験小説」という言葉を「失敗小説」として解釈しても評論家の意志に反しないと思われる。

この論文では『榎本武揚』は「失敗」あるいは「成功」した作品かという問題に深く入るつもりはない。それよりどうして安部は突然こういう小説を書いたかについて考えてみたい。どうして榎本武揚という人物を選んだか。この実に奇妙な小説はその当時の安部のほかの諸小説やエッセイとどういう関係を持つか。それにどうして『榎本武揚』という小説と戯曲はそれほど評論家に批判されなければならなかったのか。歴史上の人物、榎本武揚と同名を持つ安部の小説を短く紹介してから、こういう問題を少しでも追求したいと思う。

「榎本武揚」って誰？

日本歴史の専門家でない限り、あるいは函館出身者でない限り、大抵の人は「榎本武揚」の名前を知っていたとしても、それ以上殆ど何も知らないとされる。明治維新前後に関する歴史の本の索引を開いてみると、たとえ榎本武揚について書かれていても、それは二、三箇所過ぎないのが現状である。榎本は殆ど完全に歴史から消され

た。歴史から消されるといふのはとてもよくあることであつて、私にも同じ運命が待っていると思う。だが私と違つて、榎本は徳川の海軍副総裁、明治の陸軍の中將、海軍卿となつて明治の通信大臣、文部大臣、外務大臣、農商大臣であつた。数少ない榎本の伝記の一つを書いた加茂儀一によると、榎本は政治や軍隊の分野で見事に出世した上に、「機械工学者、鉄物学者、地質学者、地理学者、気象学者、化学者、冶金学者、植物学者」として認められて、人類学や民俗学に関心を持っていた。それに英語、ドイツ語、イタリア語、フランス語、オランダ語、ロシア語と蒙古語を話した。^{*3} オランダに留学して、最新海船技術を身に付けた榎本は最後まで徳川家に忠誠を持っていた侍を函館五稜郭に率いて、そこで選挙制度に基づいたアジアで最初の共和国を設立した。「明治・ルネサンス男」の原型榎本の運命はどう見ても私のものと違はずである。

榎本が歴史から忘れられた一つの大きな理由は福沢諭吉である。一八九一年の「瘦せ我慢の説」に福沢は榎本と勝海舟（一八二三〜九九九年）を「立国の基礎」なる「瘦せ我慢」の無い者として批判する。無血で江戸城を薩長に渡した勝海舟は確かにその行為で沢山の人の命や財産を守つたが、「立国の要素たる瘦せ我慢の士風を傷ふたるの責は免かる可らず。殺人散財は一時の禍にして、士風の維持は萬世の要なり。^{*4}」一方榎本は勝と違い、最後まで戦おうとして、徳川家に忠誠を持っていた侍を江戸から函館の五稜郭まで率いたが、戦争が終わつてすぐに「青雲の志」に誘われて新政府に入り、先に書いたように大いに成功した。福沢にとってこれは、「其忠勇を共にしたる戦死者負傷者より爾来の流浪者貧窮者に至るまで、都て同擧同行の人々に対して聊か慙愧の情なきを得ず。^{*5}」この文書によつて榎本の評判は大体定まつた。自分のことしか考えず、前の主、前の仲間を見捨てて、裏切り者ではなければ、少

なくとも御都合主義者であるということだ。

また一九三三年に日本プロレタリア演劇同盟によって出版された久保栄（一九〇〇～五八年）著（当時「東書吉」という筆名で）の『五稜郭血書』劇も榎本に対して批判的な立場をとり、神経質な「転向者」あるいは人民の裏切り者として描いている。この作品は左翼インテリ階級中での榎本の位置を硬く定めた。^{*6}

この歴史的に薄い存在のお陰で（『榎本武揚』の劇版に榎本が幽霊として現れるのは、この点で、的中だと思う）、アメリカの占領軍が日本にきて、「軍国主義」の象徴であると判断された徳川や明治の政治家などの彫刻が次から次に破壊されていったにも関わらず、榎本の彫刻は未だに無傷に残っている。ただしその彫刻をわざわざ見に行く人はまれであろう。

『榎本武揚』 ってなに？

小説の『榎本武揚』は一九六四年一月から一九六五年三月まで『中央公論』に連載され、同年七月に同じ中央公論社から単行本が出された。『安部公房全集』の十八・十九巻をみると、『榎本武揚』が連載されていた時期安部はかなり忙しかった。この間に長編小説（『他人の顔』）、シナリオ（二つ）、短編小説（一つ）、テレビドラマ（三つ）、ラジオドラマ（一つ）、戯曲（『おまえにも罪がある』）のほか数十のエッセイを書くなど安部は想像し難いペース

で活躍していたことが明らかだ。また一九六七年九月二十日から戯曲『榎本武揚』（プロローグと三幕）が上演された。その十日後に『燃えつきた地図』が新潮社によって単行本出版され、同じ一九六七年に第三回谷崎潤一郎賞受賞した戯曲『友達』も上演された。安部の文学的「頂点」とでも考えられる時期に『榎本武揚』という小説と劇が生まれて、捨て子のように忘れられるということは興味深い。

『榎本武揚』は私小説のように始まり、ものを書く職業に属している「私」が「ある放送局の依頼で北海道旅行」をする。「私」は厚岸町の福地旅館に泊まって、その主人、福地伸六から妙な話・伝説を聞かせてもらう。

明治もまだ二、三年のころ、船で護送中だった三百人ばかりの囚人たちが、途中で叛乱をおこして……厚岸の港に上陸した……だがその囚人たちは、よくよく統制がとれていたらしい。……家畜や食料や農具をすべて現金で買い集めると、船から外してきた大砲二門と一緒に手押し車に積み分けて、ゆうゆう奥地目指して脱走して行ったというのである。

その後彼らは、はてしない原野をどこまでも越えて行き、阿寒の山のふもとあたりで、彼らだけの共和国を作り上げたと言われているらしい。^{*7}

だが、福地によると、この共和国は政府をごまかすための噂に過ぎなかった。囚人たちは厚岸から一步も出ないで、そこで榎本から得た実用的な知識を使って、町を繁盛させた。福地が続いて……

こうした計画は、むろん、すべて榎本から出されたものだった。もともと、榎本は、時代が変わったからと言って、時代から取り残された人間に、罪はないという考えに立っていたが、しかし同時に、彼らを裁かなければ、時代が時代たりにえないことも認めていた。そこで、彼らを、時代から裁かれず、時代もまた、彼らを裁かずにはすまされるようにと、彼らを時代の手の届かない場所に、送り出してやることにしたわけだ。いかにも、冗談好きの榎本に、ふさわしいやり方ではあるまいか？²⁸

福地伸六が榎本武揚に興味を持った切っ掛けは歴史のあるいは学問的な関心ではない。福地は戦争中に憲兵として働いた。その間に自分の義弟が禁止されていた本を持っていることを発見し、その事を自分の上司に報告した。義弟はすぐに牢屋に入れられ、牢中で死んだ。福地の妹はそれを聞いて、福地を「人非人」として批難して、その内気が狂って病気で死んだ。妹の一歳の息子を自分の養子にし、自分の財産全てその子のものであるように遺言状を書き直したことで、妻は怒り、自分の二人の実の子をつれて家を出た。彼は戦争犯罪者として告発されてもおかしくない人なのに、戦後経済的に成功して、町の有力者になったことによってその町の人々に軽蔑され、のけものにされた。福地は前の時代に当たり前だったこと（という）、憲兵として国家に忠誠を持ったこと）が今の時代ではどうして罪になりかわったかという問題を考えることで榎本武揚を発見した。福地によると榎本だけがかれの立場の複雑さをちゃんと理解できた。

約一年後語り手「私」に突然福地から厚い封筒がくる。中身は一通の手紙と二百十九ページの「五人組結成の顛

末」という榎本に関する新資料であった。この資料によって囚人の共和国は実在したことは裏付けされたが、福地が理想化した榎本のイメージは破壊される。主に浅井十三郎という若い侍によって書かれた「五人組結成の顛末」と福地が貼り付けた新聞記事や証拠が小説の大部分になって、全集版で一八五ページになっている小説の百六十ページぐらいを占める。

浅井十三郎は新撰組副長の土方歳三（一八三五～六九年）の弟子であって、新撰組の一員である。土方と一緒に函館に渡って、一緒に五稜郭で戦った。浅井は土方の影響を受けており、榎本は徳川や榎本が率いていた侍を裏切ったと信じ込んでいる。薩長を倒して徳川家に戻すためではなく、薩長を楽に勝たせ、徳川に忠誠をもっていた侍を弱くするために函館まで行ったと思っている。「五人組結成の顛末」は具体的な例でこの理論を立証させて、浅井の仲間を榎本暗殺計画へ協力させるために書かれた。しかし計画は失敗に終わってしまう。暗殺者に浅井の戊辰と函館戦争の解釈を聞くと榎本は意外にもこの解釈を真実と確認する。

「さよう、いかにも、そのとおりの事であったのさ。万事、計画どおりとまではいかなかったが、しかし、なんとかやりおさせたよ。さんざん、思い悩むこともあったが、これこそ国難を救う道だと、わが身をはげまし、はげましして、思えばまったく、損な役目を引受けさせられてしまったものさ」(88)

江戸から函館への逃亡の目的ははまだ徳川に忠誠を持っている侍に戦争を起こす機会を与えず、少しずつ弱くし

て、激しい内戦をさけるためと榎本は気軽に打ち明ける。五稜郭を明渡す前の腹切りの試みまでも芝居であったと告白し榎本は彼の支持者に大きなショックを与える。「やはり、裏切りであったことを、お認めになるのですか。」と聞かれる榎本は自分の行為を勝海舟の江戸城の無血引渡し戦略に例える…

僕が、勝先生に心服したのは、世間が勤皇か佐幕かと騒いでおるときに、そのどちらでもない立場があることを、誰よりも先に見とおし、また実行されたからなのだ。…：僕はちようど、西洋留学から帰ったばかりで、封建国家が外国との戦争に、いかに弱体であるかを、つくづくと見聞して来たところだったから、この勝先生の説には、たちどころに共鳴さ。薩長が勝っても、いずれ薩長は残らない。負けるが勝とは、このことだ。(184)

だが支持者は榎本の説明になかなか釈然としない。この告白のニュースが獄中に広がると他の囚人の態度は榎本に対して冷たくなる。別の房では、榎本と一緒に「負けるが勝」計画を行った大鳥圭介（一八三二～一九一一年）が浅井に襲われると元榎本支持者の半分ぐらいは大鳥を守ろうとしないし、浅井に手を貸す人さえいた。

これを読んだ福地の絶望は底知れず、「息子」も、旅館も、厚岸も捨てて、百年前の囚人たちと同じように北海道の原野に消えて行く。自分の決断を「私」にこう説明する…

私はただ、憎悪に追われて、立ち去って行くのみなのであります。だが、忠誠の母が憎悪にあるとするならば、私にふ

り上げられた憎悪の鞭もまた、同じく忠誠のかたわれにほかなりませんまい。たしかに、私が義弟に加えた仕打ちには、咎められるべきものがあつたかもしれない。しかし、世間が忠誠そのものを―内容の如何を問わず、忠誠そのものを―悪徳とみなすでないかぎり、私はおのれにふり上げられた鞭を、正義の鞭とは考えられぬのであります。いさぎよく、立ち去ることにしますが、それはますます、私を過去へと追いやるだけのことでありましょう。

では、はるかに過去よりの、怨恨をこめて。

福地伸六、これを記す(9)

転向小説として『榎本武揚』

「榎本が徳川を「裏切つて」明治を支持する行為は道徳的に正しかったかどうか」この問題は『榎本武揚』について書いた評論を論じる中心点になる。なぜこの点だけが注目されるかという点、戦後日本インテリ階級は一九三〇年代から六〇年代まで「転向」という問題に直接に、そして多くの人の場合に、個人的に関わっていたからである。

一九三三年六月日本共産党中央執行委員長佐野学と党中央委員鍋山貞親の「獄中転向声明」が発表されてから転向は政治的に意味を持つようになった。単純に、転向には二つの種類がある…敗戦以前の転向と敗戦以後の転向。敗戦以前の転向の場合左翼的あるいは共産主義の思想に属している人たちは牢屋に入るか、その左翼・共産主義的な思想を否定し、活動をやめるかというような「選択」を与えられた。転向なしで牢屋を出ることは不可能に近い

はずであったので^{*8}最後まで抵抗できた人は稀であったのは当然のことであろう^{*9}。

転向政策によって政府は一九三三年から四五年まで日本共産党の活動・組織を全面的に根絶した^{*10}。憲兵はもちろん左翼を拷問したり、殺したりしていたが、小林多喜二のように運動を強める殉教者が現れるかもしれない。だが裏切り者は殉教者と同じように運動の象徴になり得ない。転向が表面的なものだとしても、一回共産主義を拒絶した人々が再び党に受け入れられることやかつての同志に再び信用されるのは簡単なことではなかったそうである。

この小説の歴史的文脈にもっとも関係するのは敗戦後の転向である。敗戦直後日本共産党は合法化されて、集中的にインテリ階級から黨員を集めようとしていた^{*11}。近年の悲劇を考えると、芸術家、文学者や学者などが共産党による革命的な未来に惹かれるのは不思議ではない。黨員のほとんどが転向したという事実にも関わらず、戦後共産党は日本軍国主義唯一の抵抗者であったという不思議な世評は戦後インテリに大きな魅力点であったと思われる^{*12}。

だがモスクワに無差別的に従うこと、ハンガリー問題^{*13}や芸術の従属化などの面にどんどん教条的な姿勢をとる日本共産党はたくさんの黨員の不満を買ってしまった。そのため戦後入党した多くの知識人や芸術家は「転向」をした。安部が党の発言や政策に対して批判的な態度をとるのは、一九五七年の東ヨーロッパの旅行以降多くなり、政治的な活動や政治的な意識はもち続けながら、共産党との関わりはどんどん稀薄になって、一九六二年には「反党的」という理由で他の数十人の文化人と共に除名された。この年代のインテリ階級には転向問題にまったく関わら

ていない人はいないはずである。ある評論家によると、「知識人のばあいには、転向の問題は、真に人間の名に価するか否か、あるいは真の意味で“生きていく”ということを目認しうるか否かを決するほどに、とりわけ重要な意義をもつ問題である」とある。^{*14}「アリバイづくりに過ぎない」や「転向者の論理に加担する」等の評価も小説自体もこの独特な環境から生まれた。

だが『榎本武揚』は転向小説として読まれた（その解釈が正しいか否かを別にして）から厳しく批判されたというわけではない。「転向文学」は戦前から比較的長い歴史を持つし、その中にもかなり高く評価された作品は少なくない。中野重治の「村の家」は「転向文学の代表作」として知られているし、^{*15}野間宏の『暗い絵』も新しい転向文学だけではなく、戦後文学として新しい表現を予示するといわれる。したがって『榎本武揚』が転向文学として見られただけが批判する理由にはならないはずである。それに安部の作品を厳しく批判した評論家の殆どが元転向者である。「アリバイ作りに過ぎない」と片付ける武井武夫は安部と一緒に、それと同じ理由で、共産党から除名されたので、小説を批判した理由は安部の転向にあるはずがない。評論をよく読むと、問題は転向ではなくて、忠誠にある。

多くの転向者はマルクス主義を捨てたから党から離れるのではなく、マルクス主義に強い忠誠を持っていたからこそ脱党しなければならなかった。マルクス主義の理想を実現するのに日本共産党という機関自体が邪魔になったからだという理由で自分の転向を弁護した人は少なくない。この場合、転向した人は「忠誠」を捨てたのではなく

て、非常に強い忠誠をもっていただけのため党から離れるほどの行為ができたという意味をもつ。しかし福地は榎本は別に高い真理、純粹な忠誠をもって転向したとは思っていない。福地が榎本から学んだのは忠誠が相対的な概念であるということである。自分の力だけでそれを変えることもなく、理解さえできない時もある時代に決められた信念に必要以上の忠誠を持つのはまったく無意味じゃないかという疑いが榎本によって生まれてくる。

しかるに、昨日を裏切らねば、今日に忠誠たりえず、今日に忠誠たらんとすれば、昨日を裏切らねばならぬというのは、いったい、いかなる理屈によるものなのでしょうか。さっぱり分からんのであります。時代や制度を自分勝手に選べるほどの者でないかぎり、ひいた籤は、全部外れときめられておるとでも言うのでありましょうか。(40—41)

福地は戦争時代の信念を作った訳でもない、ただ信じただけである。それがどうして今の時代を生きている人々が古い時代の信念を信じた福地を批判する権利があるかと理解できない。

……あの当時の信念だって、べつに私が自分でこさえたものじゃありませんからね。そこまで責任をもたらされたんじゃ、割にあわない。ただ、その時代の信念に、とくべつ忠実だったというだけのことですからな。まったく割に合いませんよ。時代が変わって、それまでの信念を否定するのだって、やはり新しい時代の、同じ信念じゃありませんか？いつだって正しいのは、その時代の信念だけなんだ。時代を信じること自体が、罪になるような時代でも来ないかぎり、いくら過去を恥じろと言われても、そいつは無理というものですよ。(26)

福地は確かに自分の義弟に対して悪いことをしたと認めるが、それと同時にもし彼が違う時代にも生きていればそんな選択をする必要なかったはずだとする。そうすると責任を全部彼自身が負担するのは正しいといえるのか。福地は榎本がそういうことを隅から隅まで分かっていたと信じている。

あの方だけは、そういうことを、万事すっかり飲み込んでおられた。時代が変わったからと言って、時代から落伍した人間に、罪があるわけじゃないってことをね。そこで、そんな連中のために、時代の手がとどかないくらいの山奥に、新しい国を作っておやりになった。(26)

当然ながら多くの評論家は福地の言い分を認める訳には行かない。『民主文学』の北村耕によると忠誠そのものがだめなのではなく、理想の価値が問題なのである。

……信念（理想）の正しさは、それが人類発展に貢献するものであるかどうかによって、おおよそきまるのではないか。だからファシズムは、たとえ「時代の信念」であったとしても、正しくない。それはわたしたちが体験したとおりです。^{*16}

北村の文章は普遍的、それに不変的な真理あるいは価値観が存在することを前提としているのはいうまでもない。そういう面で福地とは正反対の立場にあり、二人の間に対話は成立しない。だが違う面で二人の説は妙に共通点を

持つ…どちらも個人の自由がない。福地の説によると、時代の信念は「地球より大きい」し、一個人が簡単に選べる訳ではないので、その信念が時代と一緒に変わるとしたら、前代の信念を信じていた人達を責めるのは無意味な行為であるというもの。北村の論理は単純に言えば、絶対価値観（というのは正統的なマルクス主義であるらしい）は存在するし、その価値観によって人の行動を判断すべきであるということである。どちらの説の場合も個人の「自由」は決まった信念に従うか従わないか、その二つに限られている。

榎本の共和国と第三の道

『榎本武揚』の弁護者がいうには、安部の小説は「転向」と「道徳」との絆を切る機械であるそうだ。確かに安部自身、「忠誠は善し、転向は悪」という「明治以来の伝統的美学」^{*17}を破壊することが一つの大事なテーマであると書く。転向は「弱さ」の証ではなく、歴史的な変換によって作られる現象に過ぎない。「裏切者」というのは、いうまでもなく相対的な概念である^{*18}という弁護者側の断言は間違っているといえない。だが転向ということが歴史の進歩のさけられない結果だとして解釈を終えるのであればこの小説の重要なテーマを無視することになる。そのテーマは共和国として現れる「第三の道」である。

『榎本武揚』を“転向小説”として読もうとするならば、そもそも“転向”とはなにかという“転向論”に対する反措定の作品になる。しかし、忠誠という概念は、個と全体の問題を解く“補助線”として設定された、というのが真意の

ようである。^{*19}

作品中の函館共和国や厚岸共和国は安部の新しい共同体の理想像だとして考えられる。「個と共同体」の問題は一九六二年の『砂の女』から安部の中心的なテーマだったが、一九四八年『終わりし道の標に』から安部はこの問題に関心を持っていた。この前の『けものたちは故郷をめざす』の論文にもこの問題が国家と個人との対立として現れることを指摘した、「内なる辺境論」という安部の一九六八年のエッセーでは反ユダヤ主義のメタファーを通して近代共同体形成の仕方を厳しく批判する。

「反ユダヤ主義なるものの根拠が、ユダヤ人の存在そのものよりも、むしろ「本物の国民」という正統概念の要請の内部にひそむ、一種の自家中毒的症状だと考えて、まず間違いはなさそうだ。」^{*21} 安部によると反ユダヤ主義者はユダヤ人を排除することによって、自分を「本物の国民」として安定化されたアイデンティティを作り上げることができる。そこでなぜユダヤ人かという点、安部の言い分は、ユダヤ主義がなんらかの特色を持つからではなく、「都市的」に合成されたからである。「本物の国民」は郷土や土地との神秘的な関係から生まれてくることに対し、ユダヤ人は土地への定着がなく、都市から都市へ、ノマド的なるものである。反ユダヤ主義者は都市性を持つものを「ユダヤ的」と焼印し追放することによって、自分たちを「本物の国民」というアイデンティティで固定しようとする。安部が「内なる辺境論」でよく参照する『ユダヤ人』（一九四六年）でサルトルはこの現象について書く。

(ユダヤ人)の存在のお陰で、反ユダヤ主義者は、自分の苦悩を殻の中にとじこめてしまうこと、世界の中に自分の位置がはっきりと定められ、その位置は、彼のためにあけられていて、自分の伝統によって、そこへ座る権利があると考えることができるのである。反ユダヤ主義者は、一口に言えば、人間の条件に対する恐怖である。反ユダヤ主義者は、無慈悲な石に、怒りたける激流に、破壊的な雷に、その他すべてのものになりたがるけれども、人間だけにはなりたがらない人間なのである。^{*22}

土地との関係、あるいは土地への信仰は皆それぞれ位置付けられる。自分は誰か、何を信じればいいのか、どういふふうを考えるべきかという問題は全部この信仰によって解決される。自分以上の力によって位置付けられると人はその決まった役割を果たす以外に責任がなくなる。

浅井や土方の「忠誠」は神秘的な「土地への信仰」と同じように働く。自分が侍であって、武士道を信じ、主人に最後まで忠誠をもつことによって、自分のアイデンティティーは固定される。福地の言葉を借りると、「忠誠とはすなわち、一つの時代に支払った、身分保証の代金である。」⁽⁴⁾勿論忠誠を誓うことによって個人の自由はある程度失われる(福地の場合は義弟を見逃す自由を失った)けど、その代わりにその時代の人として認められる。その時代の理想や価値観に従うと安定した人生を送れるはずである。だが福地も、浅井も経験するように、この信仰は現実に基づいたものではなくて、その現実から逃げる一つの試みに過ぎない。土方だけが、自分の命を捨てることによって、その信仰を最後まで保った。

榎本の共和国は個人と共同体との非論理的な関係の基礎となった「忠誠」を破壊しようとする。小説の目的は福地がいったように「忠誠を相対的な概念」として考えることではないし、忠誠を誓うべき「正しい理想」を断定することでもない。「函館や厚岸の共和国の目的は「忠誠」という概念自体を消すことである。最終的に意味を理解しなくても、函館共和国の選挙について書いている福地でさえこれを認める。

選挙するということは、とりもなおさず、選挙権を持った者を全員一度、同格の水準に引きおろしてしまうことである。その瞬間に、忠誠心は相手を失い、下手をすると恢復不能の業病にかかってしまわぬともかぎらぬではありませんか。おそらくその衝撃こそ、榎本さんの、真のねらいであったのに相違ないのであります。(152)

赤十字病院の設置や捕われた敵軍兵士の扱い方も選挙と同じように封建的な忠誠に衝撃を与えるものだ。福地によると「敵を殺せば、腹を裂いて、肝臓を食ったような時代だった」(153)ので、敵味方無差別で手当てしてくれる病院は当時の日本には革命的な発想のほずである。捕まえた敵軍兵士に船で国に戻るかその辺で農民か商民になるかという選択を与えるのも大きな変化だと思われる。新しい政策は、「敵」という概念を相対化することであった。当時の「死んでも敵だ」という考え方は大きく変って、敵は抵抗する力を失う瞬間に敵ではなくなるといふようになりかかっていた。敵は試合の相手のような者として考えられるようになった。敵を再定義すると、敵の対立者の「味方」という概念も当然相対化される。しかし浅井、土方と福地の忠誠心は絶対なものではないといけない。絶対

なものであるからこそ一回契つたら、それ以上疑問を持つ自由も責任もない。だが選挙制度になると、忠誠対象は絶対でなくなる。選ぶ責任、支持し続ける責任もあるので、封建的な忠誠のアイデンティティーを安定化する効果がない。結局こういう過程で榎本が武士道を根絶しようとしていることは確かである。

しかし榎本は封建的な忠誠を批判したからといって近代の忠誠を是認した訳ではない。福地と同じように武士道忠誠心拒否が榎本の「真のねらい」だと信じ込んだ評論家は「この榎本の過程は、その小さな規定（徳川・侍）を次第に、脱ぎ捨てて大きな規定の中へ移行するという種類のものである。かれは次第に、自ら視野拡大して」最後に彼は「幕臣であり、武士である以前に、日本人であったというわけだ」と書く。^{*23}だが福地もこの評論家もどうして忠誠心をなくさなければならぬかということが理解できない。確かに武士道的な忠誠心を完全に壊そうとするのは一つの不可欠のステップであるが榎本の「真のねらい」はそこにとどまらない。個人のアイデンティティーを安定化する、あるいは固定化するタブーに守られている神聖な場所に闖入しようとしているのだ。このアイデンティティーの「聖地」を荒らすことによって新たな共同体の可能性を見せようとしている。これは、榎本の言葉を借りると、「種を蒔く」試みである。

その中でもっとも荒らされるべき聖地は物語化されて歴史に基づいている共同体である。物語化されたディスコースの中では語り手が消されて、その内容は「事実そのまま」書かれているような印象を与える。^{*24}近代国家や他の数多くの共同体はこの「物語化された」歴史的なディスコースを利用して、共同体の位置や存在する権利を強調

する。バリバーはこの結果を「回顧的な幻想」とみなす。

国民の歴史は、これまでつねに、各国民に主体としての連続性を付与する物語という形式をとって現れてきた。……このような表象は確かに回顧的な幻想を構成しているが拘束的な制度的現実を表してもいる。幻想は二重である。そのような幻想は、数世紀のあいだほぼ安定した領土の上でだいたいにおいて同じ呼び名のしたに引き継がれる諸世代が、不変の実体を伝達していると確信することにある。それはまた、現在のわれわれ自身を变化の到達点として理解するために、われわれがそこからいくつかの側面を回顧的に選別するところの变化が唯一可能のものであった、そのような変化は運命的であった、と信じることにある。^{*25}

共同体は自分を長年蓄積された歴史や運命的な結果として見せることによって、個人を支配する権利を正当化する。同時に個人はこれを見て、共同体がこんなに空間的に、それに時間的に巨大なものだとしたら、一個人が抵抗できるはずがないと思いついてしまうのである。福地の「時代」や「制度」の信念に抵抗できない理由は、ある程度その「時代」や「制度」は「地球同様、自分勝手にどうこう出来るという代物ではない」⁽⁴⁰⁾と知っているからである。それと同時に、時代・制度・共同体が抵抗できないほど大きなものだと考えると、個人がその分責任を負担する必要もなくなる。

しかし榎本の共和国は一つの共同体としてこの枠組みにあてはまらない。函館共和国も、厚岸共和国も最初から短命のものとして見せられ、非歴史的な共同体あるいは反歴史的な共同体の可能性を追求する。函館共和国が徳川

に基づいた「亡命中」政府として創立されなかったのは大きな意味を持つ。共和国の権力を歴史によって正当化しようとしないうで、「新しい共同体」を作る要望から生まれる。したがって共和国に参加する人達は意識的にその共同体がどういふものになるかを選ばなければならない。この場合には個人の責任を放棄せずに共同体に属することが可能になる。

共和国は歴史がないだけでなく、長生きする見込みもない。榎本は函館共和国は失敗で終わるものと最初から知ってて、あくまでも「実験」として創立した。厚岸共和国の市民は全員男であって、一つの世代で終わることはさらに明らかである。共和国の一時的な存在だったので、その市民たちは「代々に不変な本質を継承する」^{*26}「歴史的な共同体」としてのアイデンティティを作り上げることはできないし、一つの歴史的物語の一部として自分を理解することもできず、自分の役割はその歴史的物語の流れの裂け目役としてでしか自分を理解し得ない。

安部はこの問題を「隣人」と「他人」の概念をもって具体的に話す。

われわれは、共同体内部の人間を「隣人」としてとらえ、外部の人間を「他人」としてとらえる。そして、「他人」は敵である「隣人」は味方だ。キリスト教だったら、「他者もまた隣人である」というわけで、「隣人」概念を「他者」にもおよぼし、その垣根をこわそうとする。動乱後の明治天皇と政府がとったテクニクも、これによく似ている。^{*27}

「隣人」という概念を作り上げるのに個人個人を標準化する原則が必要となる。この原則の一つは忠誠だと考えられる。多数の人間が同じもの（明治天皇、日本共産党、アメリカの国旗）に忠誠を誓うことによって共用している特色があるかのように見せる。その幻想によって共同体の存在感が強まってくる。だがこの過程で共同体以外の人達と交流できないことが当然としても共同体内に交流は可能になるであろう。隣人共同体はあくまでも「共用しているアイデンティティー」を媒体として使って、「交流」を行う。しかし、この交流は閉鎖的な自己を確認する・固定することしかできないはずである。バフチンの言葉を借りると、この交流形態は「モノロジカル」であって、他者を排除する非常に貧しい交流形態になる。^{*28} 表面的に共用している特色を通さないで交流しようとすれば、それは他人として交流するしかないと思ふ。

われわれは、隣人をキリスト教的に拡大して行って他者に及ぼすのではなく、むしろわれわれの内にある隣人思想を抹殺することによって、他者との直接的なコミュニケーションをはからなければならない。……他者との直接的なコミュニケーションを回復してゆかないかぎりにもならない。隣人というものの枠のなかで隣人と隣人を仲良くさせようという、一種のナショナル・インタレストによる仲介方法では、もう問題を解決できない段階にきている。^{*29}

「隣人」という概念は「孤独」への恐怖に対して生まれるが、「孤独」というのは「感覚にすぎない」し、「現状」だと理解できたら、他者を他者としての交流が初めて可能になる。実存主義的な単語で言い換えると、忠誠のような概念を媒体にした「隣人社会」の中に生きる人々は「不誠実」に生きているとしか思えなくなる。小説に戻ると、

榎本の共和国は「他人社会」の一つの例として用いられる。共和国は「隣人」という妄想的な親密さに頼らないで、「他者のまま人間が結びつきを回復」する機会である。忠誠、歴史、それに外国同様蝦夷地に創立された共和国は土地との感情的な絆で個人を「標準化」させる仕組みを全て拒絶するによって「隣人を媒体としないで他者を発見」できて、個人の自由を束縛しない共同体が可能になる。隣人共同体は孤独や疎外を無くすためにあるとはいえるけど、他人社会には他者と繋がりを持たないことが自由の元となる。孤独や疎外はこの世の避けられない事実として、それを認めた瞬間に、個人は自由を得る。これは人間と人間とがまったく繋がらないというよりも、人間と人間との関係はかならず他者と他者との関係であるということの意味する。他者を「隣人」の枠にむりやり入れる・入れられる必要はなくなる。榎本の共和国の場合、個人は共同体の一部として存在するのではなくて、一時的な共同体と接しながら存在する。共同体と個人との絆はいつでも切れるような弱い関係である。^{*31}

安部の「実存的」な共同体は明らかに政治的な意味を持つけど、60年代の文脈から考えると広い、哲学的な政治性の上に、具体的な左翼批判も含まれている。一九五六年のチェコ作家大会で東ヨーロッパを見た安部は、共産主義に強い同情を持ち続けていることにも関わらず、共産主義国家の革命性を疑い始めた。一九五七年大日本雄弁会講談社から出版された「東欧を行く―ハンガリア問題の背景」に共産国の「天国病」に関して書く。

……社会主義建設のエネルギーを感じさせるといふより、むしろ社会主義経済学の教科書を図解したような静的な印象のほうが強い。革命的なものよりも伝統的なのが、矛盾より秩序が、支配的だった。^{*32}

伝統を強く嫌っていた安部にはこれは悔しい発見だったに違いない。伝統は一つの物語化された歴史で、先験的に個人を定義しようとする力であると思っていた安部にとっては、自我を捨ててまで共同体に入り込まず、自分の独立性・孤独性を守りながら共同体に接することだけが革命の道になる。革命思想の不可欠原理は個人の自由を認めることである。そうしないとかつての革命思想はすぐに硬化され、教条化されてしまう。安部は日本共産党から除名された直前に日本の思想状態を厳しく批判する。

(革命思考は) 分析の破壊作用を創造に転化しえず、それを危険なもののみなしてただ排除するやり方は、ちょうど生物の新陳代謝をエネルギーの崩壊としてだけ考え、みずから冬眠をえらぶのと変わらない。^{*33}

『榎本武揚』の小説も劇もこのような創造的な分析の破壊作用を持っていると思われる。安部は榎本と同様に「連帯のための万能接着剤としてもちだされる忠誠概念に批判を加えようとした。^{*34}」『榎本武揚』の劇で榎本が「この世を実験室に心得ている」ことやこの世を自分の玩具同様に考えるなどと最強の味方までに批判された^{*35}と同様に『榎本武揚』という小説も「実験小説」として普段安部を強く支持する評論家に批判される。だが安部の他人社会は必ず「実験」でないといけない。安部にとって「誠実」な人生は実験そのものでなければならぬ。伝統や歴史を捨てて、自分で判断しながら、実験的に生きるしかないと言っている安部の小説は最終的に榎本の共和国と同様に忘れられた。しかし榎本の最後の台詞を読むと、これは必ずしも悪い結果というより必然的な結果であったのかもしれない。

れない。

向うが殿様の幽霊なら、こっちは共和国の幽霊さ。どうやら本物よりも、幽霊のほうが、ずっと恐ろしいものらしいからね。どうせ現実の見込みがないんなら、せめて夢の種でもまいておきたいと思っただけ……この次、百年後の夢を見る
*₃₆
時のために……

注

- * 1 武井昭夫「危機意識の欠落について」『新日本文学』一九六六年二月(223号)、208。
- * 2 中村新太郎「忠誠心」の問題と歴史小説—安部公房『榎本武揚』とその批評をめぐって『赤旗』一九六六年三月十四日(5561号)、6。
- * 3 加茂儀一『榎本武揚』(中央公論社、一九六〇)、まえがきの3頁目。
- * 4 福沢諭吉「瘦せ我慢の説」『福沢諭吉集 8』(筑摩書房、一九六六)、260。
- * 5 同書、263・264。
- * 6 中村新太郎は久保栄の『五稜郭血書』と安部の『榎本武揚』を比較すると「本格的な歴史文学である『五稜郭血書』とは、もともと血統が違」って『榎本武揚』は「歴史の事実や真実にささえられていないで、作者の主観のつくりごとにすぎない」と断言する。中村新太郎、6。戦後歴史学の左翼的な傾向を考えると、これは榎本に關した研究の少なさの一つの大きな理由だと思われる。
- * 7 安部公房『榎本武揚』『安部公房全集 18』(新潮社、一九九九)、8。これからの『榎本武揚』の引用のページは本文で()で記す。
- * 8 といつても、転向をしたから必ずしも牢屋を出れる訳ではなかった。一九三三年に自分の転向で大量転向を奮起させた鍋山は一九四〇年の恩赦まで牢屋に入っていたことはその一つの例である。
- * 9 転向者があらわれたというのは警察による圧迫や残忍性だけによるものではなく、戦前共産党が日本の現状を無視して、素直にコミンテルンを従ったことよって党から黨員・国民が離れた。両方の要素を合わせると転向者が多くなることは驚くほどのことではないかもしれない。Robert A. Scalapino, *The Japanese Communist Movement, 1920-1966*, (Berkeley: University of California Press, 1967), 42-47; Paul F. Langer *Communism in Japan*, (Stanford: Hoover Institution Press, 1972), 3-15。
- * 10 戦前共産党は多い時でも正式な黨員は千人を超えなかったし、普段の時には百人もいなかった。一九三五年から四五年までに「運動」として存在しなくなった。Scalapino, 45; Langer, 8。
- * 11 Scalapino, 71。

- * 12 同書、71。
- * 13 一九五六年にソ連は非スターリン化を求めているハンガリー市民の抵抗を武力でおさえ、ソ連政策を支持する政権を立てた。
- * 14 田村栄「歴史小説にあらわれた転向の問題―『榎本武揚』と『沈黙』について」『文化評論』一九六七年二月(64)、79。
- * 15 Donald Keene, *Dawn to the West*, (New York: Henry Holt and Co., 1984), 883。
- * 16 北村耕「『壁』のなかの存在と転向(下)―安部公房の世界」『民主文学』一九六七年二月(15)、136。もちろんこの場合「人類発展に貢献するもの」はマルクス主義の発展概念をさす。
- * 17 安部公房「幕末・維新の人々」『安部公房全集 18』、317。
- * 18 別役実「『裏切者』の系譜―榎本武揚伝説」『幻景のユートピア…歴史・ルポ・評論・北方の問題』(おりじん書房、一九七四)、29。
- * 19 安部公房「戯曲が認められて」『安部公房全集 21』、111。
- * 20 ジボー・マーク「荒野上の存在―安部公房における境界とアイデンティティ」『比較文化論叢』二〇〇一年九月(8)、7、26。
- * 21 安部公房『内なる辺境』(中央公論社、一九七二)、104。
- * 22 「P.サルトル『ユダヤ人』安堂信也訳(岩波新書、一九五六)、61、62。
- * 23 田村栄、79。
- * 24 「物語化された」デイスコースについて Hayden White, "The Value of Narrativity in the Representation of Reality," *The Content of the Form: Narrative Discourse and Historical Representation*, (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1987), 1-25に参照。
- * 25 エティエンヌ・バリバル、イマニユエル・ウォーラーズテイン『人種・国民・階級』若森章孝など訳(大村書店、一九九七)、157、158。
- * 26 同書、157。

- * 27 安部公房「隣人を超えるもの」『安部公房全集 20』、391。
- * 28 勿論「他者」を「隣人」にすることによって「交流」する試みは少なくない。日本帝国の大東亜共益圏はその一つだと思われるが、結局これはレトリックの面にも、政治力・軍事力の面にもモノロジカルそのものであった。「交流」できるために、まずある形で「日本人」として作り直さなければならぬ。安部が『友達』に示すように、隣人は他者の存在を許せなくて、殺すか隣人として作り直すか（他者にとって両方は「死」になるが）、その二つの選択しかない。平和共存という概念は隣人社会には存在しない。
- * 29 同書、392-393。
- * 30 安部公房「この人・インタビュー 安部公房」『安部公房全集 21』、466。
- * 31 メンバーが標準化されない共同体は「共同体」と呼んでもいいかどうか疑問をもつ。個人のアイデンティティを犠牲にしないことは、均質的な共同体が出来上がらないという意味を持つし、安部が想像する共同体は非常に短い時間で現れたり、消えたりするものなので、「共同体」と呼ぶなら、それは非常にラジカルな共同体として考えなければならぬ。安部の劇団はこのような共同体を作る具体的な試みだと思われる。Timothy Iles, *Abe Kobo: An Exploration of his Prose, Drama, and Theatre*, (Ann Arbor: UMI Dissertation Services, 1997), 187-254; Nancy K. Shields, *Fake Fish: The Theater of Abe Kobo*, (New York: Weatherhill, 1996) 参照。
- * 32 安部公房「東欧を行くーハンガリア問題の背景」『安部公房全集 7』、43。
- * 33 安部公房「編集後記」『安部公房全集 15』、372。
- * 34 安部公房「隣人を超えるもの」『安部公房全集 20』、391。
- * 35 安部公房『榎本武揚ープロローグと三幕』『安部公房全集 21』、108。大鳥圭介、永井十三郎と松平太郎も榎本の「実験性」を強く批判する。
- * 36 同書、108。